

【砧】きぬた

昔、繊維の硬い布は、木製の槌で打って柔らかくしたそうです。光沢を出す働きもあったようです。冬の準備として収穫を終えた女性の仕事でした。このとき用いた槌、あるいは槌と石の台を合わせて砧といいます。「きぬの板」が転じて「きぬた」となったようです。現代では聞くことはないでしょうが、晩秋の夜に響く砧の音には、しみじみとした寂しい風情が感じられたことと思います。

謡曲『砧』は世阿弥会心の作といえるでしょう。筑前芦屋のある男は妻を故郷に残し、都へ行ったきり長らく帰郷しません。妻は帰らぬ夫への恋慕と恨みとの間で苦しみ、砧の音に思いを託し夫へ届けと願うのでした。ようやく男が帰郷した時、既に妻は病死していたという悲しい話です。

遠く離れた夫を思い砧を打つ妻の姿は、蘇武の故事に源があります。蘇武は漢の人。使者として北方の匈奴に赴きましたが、無念にも囚われの身となりました。匈奴の誘惑にも祖国を裏切ることなく、雁の足に手紙を付けて生存を知らせ、苦勞の末生還を果たしました。その忠義ぶりは『漢書』の称えるところです。

遠方の蘇武に、故郷の妻子が打つ砧の音が聞こえたという話は『漢書』にはなく、原典こそ不詳ですが平安時代には既に日本で知られていたようです。

南宋の龍泉窯の上手の青磁を日本では砧青磁と呼びます。この名の由来は、砧形の青磁花入から付いたという説、利休がヒビのある青磁を見て、響きがあるとして砧の音にかけたという説が伝わっています。

南宋時代のものを砧青磁、元・明時代のものを天竜寺青磁、明末時代のものを七官青磁と呼び分けているのは茶の湯の世界独特の名称で、美術史用語ではありません。

青磁茶碗銘馬蝗絆(東京国立博物館)・青磁筒花生銘大内筒(根津美術館)・鳳凰耳付花入銘千声(陽明文庫)・同花入銘万声(和泉市久保惣記念美術館)などが世に知られています。

馬蝗絆の銘の由来は、ひび割れを止める鋊をイナゴ＝馬蝗に見立てての銘です。『馬蝗絆茶甌記』(伊藤東涯)によれば、ひび割れした際、所持者であった足利義政が明の国へ換わりの茶碗を求めたところ、もはやこれほどのものは作れないと鉄の鋊で割れを止めて送り返してきたということです。

大内筒は所持者銘です。守護大名大内氏の所持だったことに因みます。裏に掛け穴がありますが後から空けられたもので、本来は花入ではなく文房具だったと思われます。

最後に銘「千声」「万声」の出典となった漢詩をご紹介します。

夜の砧を聞く 白居易

誰が家の思婦か秋に帛を擣つ 月苦かに風凄じくして砧杵悲し 八月九月正に長き夜 千声万声了る時無し 応に天明に到らば頭尽く白かるべし 一声添へ得たり一茎の糸